

誓之卷

泉鏡花

青空文庫

団
戀

石
段

菊
の
露

秀
を
忘
れ
よ

東
枕

誓

団欒

後の日のまどいは楽しかりき。

「あの時は驚きましたたっけねえ、新さん。」

とミリヤアドの顔嬉しげに打まもりつつ、高津は予を見向きていう。ミリヤアドの容体はおもいしより安らかにて、夏の半一度その健康を復せしなりき。

「高津さん、ありがとう。お底様で助かりました。上杉さん、あなたは酷い、酷い、酷いもの飲ませたから。」

と優しき、されど邪慳じゃけんを装える色なりけり。心なき高津の何をか興ずる。

「ねえ、ミリヤアドさん、あんなものお飲ませだからですねえ。新さんが悪いんだよ。」

「困るねえ、何も。」と予は面を背けぬ。ミリヤアドは笑止がり、

「それでも、私は血を咯はきました、上杉さんの飲ませたもの、白い水です。」

「いいえ、いいえ、血じゃありませんよ。あなた血を咯いたんだと思って心配していらつしやいますけれど血だmondですか。神経ですよ。あれはね、あなた、新さんの飲ませた水

に着ていらつしやった襦袢じゅばんのね、真紅まつかなのが映つたんですよ。」

「こじつけるねえ、酷いねえ。」

「何のこじつけなもんですか。ほんとうですわねえ。ミリヤアドさん。」

ミリヤアドは莞爾にっことして、

「どうですか。ほほほ。」

「あら、片鼻屑かたびいきを遊ばしてからに。」

と高津はわざとらしく怨じ顔えんなり。

「何だつてそう僕をいじめるんだ。あの時だつて散々さんざん酷いめにあわせたじゃないか。乱暴なものを食べさせるんだもの、綿めんの餡あんなんか食べさせられたのだから、それで煩わづうんだ。」

「おやおや飛んだ処とこでね、だつてもう三月も過ぎましたじゃありませんか。疾とつくにこなれてそんなものですね。」

「何、綿めんが消化こなれるもんか。」

ミリヤアド傍かたわらより、

「喧嘩けんかしてはいけません。また動悸どうきを高くします。」

「ほんとに串じょうだん戯よは止して新さん、きづかうほどのことはないのでしょうね。」

「いいえ、わけやないんだそうだけれど、転地しなけりや不可^{いけな}ッていうんです。何、症が知れてるの。転地さえすりや何でもないって。」

「そんならようござんすけれど、そして何時の汽車だッけね。」

「え、もうそろそろ。」

と予は椅子^{いす}を除けてぞ立ちたる。

「ミリヤアド。」

ミリヤアドは頷^{うなず}きぬ。

「高津さん。」

「はい、じゃ、まあいつていらつしやいまし、もうねえ、こんなにおなんなすつたんですから、ミリヤアドのことはおきづかいなさらないで、大丈夫でござんすから。」

「それでは。」

ミリヤアドは衝^つと立ちあがり、床に二ツ三ツ足ぶみして、空ぎまに手をあげしが、勇ましき面^{おも}色^{もち}なりき。

「こんなに、よくなりました。上杉さん、大丈夫、駈^かけてみましょう。門^{かど}まで、」
といいあえず、上着の片^{かた}褌^{つま}搔^{かい}取りあげて小^こ刻^{きざみ}に足はやく、颯^{さつ}と芝生におり立ちぬ。

高津は見るより、

「あら、まだそんなことをなすツちやいけません。いけませんよ。」

と呼び懸けながら慌しく追^{あわただ}う行きたる、あとよりして予は出でぬ。

木戸の際にて見たる時ミリヤアドは呼吸^{いきせわ}忙しくたゆげなる片手をば、垂れて高津の肩に懸^{こうべ}け、頭を少し傾けいたりき。

石段

「いいめをみせたんですよ、だからいけなかつたんです。あの当時しばらくはどういうものでしょう、それはね、ほんとに嘘のように元気がよくおんななすツて、肺病なんてものは何でもないものだ。こんなわけのないものはないツてつちや、室^{へや}の中を駈^かけてお歩^{ある}行きなさるじやありませんか。そうしちやあね、（高津さん、歌をうたツて聞かせよう）ツてあの（なぎれの歌）をね、人の厭^{いや}がるものをつかまえてお唄いなさるの。唄つちや（ああ、こんなじや洋^{オルガン}琴も役に立たない、）ツて寂^{さみ}しい笑顔をなさるとすぐ、呼吸^{いき}が苦しくなツて、顔へ血がのぼツて来るのだから、そんなことなすツちやいけませんツて、いつでも

寝さしたんですよ。

しかしね、こんな塩梅あんばいならば、まあ結構だと思って、新さん、あなたの処へおたよりをするのにも、段々快いい方ですからお案じなさらないように、そういつてあげましたつけ。そうすると、つい先月のはじめにねえ、少しいつもより容ようす子が悪くおんなすったから、急いで医者に診せましたの。はじめて行つた時は、何でもなかったんですが、二度目ですよ。二度目にね、新さん、一所にお医者様の処へ連れて行つてあげた時、まあ、どうでしょう。」

高津はじつと予を見たり。膝にのせたる掌たなそこの指のさきを動かしつつ、

「あすこの、あればかりの石壇にお弱いくなすツて、上の壇が一段、どうしてもあがり切れずに呼吸いきをついていらつしやるのを、抱いて上げた時は、私も胸を打たれたんですよ。

まあ可いい、可いい！　ここを的に取つて看病しよう。こんで来るまでにはきつと独ひとりでお上あがんなさるやうにして見せよう。そうすりや素人目にも快よくおんなすった解わかりが早くツて、結句張はり合あがあると思つたんですが、もうお医者様へいらつしやるのが出来たのはその日ツきり。新さん、やつぱりいけなかつたの。

お医者様はとていけなかつて云いました、新さん、私やじつと堪こたえていたけれどね、

傍^{そば}に居^とた老^{とし}年^{より}の婦^{おんな}人^なの方が深切^{しんせつ}に、（お氣の毒様ですnee。）

といつてくれた時は、もうとても我慢が出来なくなつて泣きましたよ。薬を取^たつて溜^{ため}へ行^いツちや、笑^{わら}つて見^みせていたけれど、どんなに情^{なさけ}なかつたでしょう。

様子に見^みせまいと思^{おも}つても、ツイ胸^{むね}が迫^{せま}つて来るもんですから、合^あ乗^{いのり}で歸^{かへ}る道^{みち}で私の顔^{かほ}を御覽^{ごらん}なすつて、

（何だnee、どうしたの、妙な顔^{かほ}をして。）

と笑^{わら}いながらいつて、憎^{にく}らしいほどちやんと澄^{すま}していらつしやるんだもの。氣分^{きぶん}は確^{たしか}だし、何^{なに}にも知らないで、と思^{おも}うとかわいそうで、私^{わたし}やかわいそうで。

今更^{いま}じやないけれど、こんな氣立^{きだて}の可^かい、優^{やさ}しい、うつくしい方がもう亡^なくなるのかと思^{おも}つたら、nee、新^{あらた}さん、いつもより百倍も千倍も、優^{やさ}しい、美^{うつく}しい、立派^{りつぱ}な方^{かた}に見^みえたらうじやありませんか。逃^{あつち}えて拵^{こしら}えたような、こういう方がまたあらうか、と可^{あつち}惜^はもので。可^{あつち}惜^はもので。大事^{だいじ}な姉^{あね}さんを一人、もう、どうしようと、我慢^{がまん}が出来なくなつてね、車^{くるま}が石^{いし}の上^{うへ}へ乗^のつた時^{とき}、私^{わたし}やソツと抱^{かか}いてみたわ。」とぞ微^ほ笑^{えみ}たる、目^めには涙^{なみだ}を宿^{やも}したり。

「僕^{ぼく}は何^{なに}だか夢^{ゆめ}のようだ。」

「私だつてほんとうにやなりません位ひどくおやつれなすつたから、ま、今に覽^みてあげて下さいな。」

電報でもかけようか、と思つたのに。よく早く出京^でて来てね。始終上杉さん、上杉さんツていつていらつしやるから、どんなにか喜ぶでしょう。しかしね、急にまたお逢いなすつちや激するから、ソツとして、いまに目をおさましなすツてから私がよくそういつて、落着かしてからお逢いなさいましよ。腕^{くるま}車やら、汽車やらで、新さん、あなたもお疲れだろうに、すぐこんなことを聞かせまして、もう私や申訳がございません。折角お着き申していながら、どうしたら可^いいでしょう、堪忍なさいよ。」

菊の露

「もうもう思^{おも}入^{いれ}ここで泣いて、ミリヤアドの前じゃ、かなしい顔をしちやいけません。そつとしておいてあげないと、お医師^{いしや}が見えて、私が立廻^かつてさえ、早や何か御自分の身^{からだ}に異^かつたことがあるのかと思つて、直^{すぐ}に熱^{あつ}が高くなりますからね。」

それでなくツてさえ熱がね、新さん四^{しじゅう}十度の上あるんです。少し下るのは午前のうち

だけで、もうおひるすぎや、夜なんざ、夢中なの。お薬を頂いて、それでまあ熱を取るんですが、日に四度ぐらいずつ手巾ハンケチを絞るんですよ。酷ひどいじゃありませんか。それでいて痰たんがこう咽喉のどへからみついてて、呼吸いきを塞ふさぐんですから、今じゃ、ものもよくは言えないんでね、私に話をして聞かしてと始終そういうっちゃあね、詰つまらないことを喜んで聞いているの。

どんなにか心細いでしょう。寝たつきりで、先月の二十日時分から寝返りさえ容易じゃなくって、片寝でねえ。耳にまで床ずれがしてますもの。夜よが永いのに眠られないで悩むのですから、どんなに辛いかわりません。話といたってねえ、新さん、酷く神経が鋭くなってる、もう何ですよ、新聞の雑報を聞かしてあげても泣くんですもの。何かねえ、小鳥の事か、木の実の話でもッておっしゃるけれど、どういったいいのかわらず、栗がおツこちるたって、私や縁起が悪いもの。いいようがありません。それでなければ、治なつてから片瀬の海浜にでも遊びにゆく時の景色なんぞ、月が出ていて、山が見えて、海が凪なぎて、みさごが飛んで、そうして、ああするとか、こうするとかいって、聞かせて、といいますけれど、ね、新さん、あなたなら、あなたならば男だからいえるでしょう。いまにあなた章魚たこきゅうに灸きゅうを据たえるとか、蟹かにに握飯かきめしをたべさすとかいう話でもしてあげて下さいまし。私に

や、私にや、どうしてもあの病人をつかまえて、治ってどうしようなんていうことは、情なくツて言えません。」

という声もうるみにき。

「え、新さん、はなせますか、あなただつて困るでしょう。耳が遠くおなんなすつたくらい、茫としていらつしやるのに、悪いことだと小さな声でいうのが遠くに居てよく聞えますもの。」

せいせいツてね、痰が咽にからんですのが、いかにもお苦しうだから、早く出なくなりますようにと、私も思いますし、病人も痰を咯くのを楽しみにしていらつしやいますがね、果敢ないじやありませんか、それが、血を咯くより、なお、酷く悪いんですとさ。

それでいてあがるものかというと、牛乳を少しと、鶏卵ばかり。熱が酷うござんすから舌が乾くツて、とおし、水で濡しているんですよ。もうほんとうにあわれなくらいおやせなすつて、菊の露でも吸わせてあげたいほど、小さく美しくおなりだけれど、ねえ、新さん、そうしたら身体が消えておしまいなさろうかと思つて。」

といいかけて咽泣き、懷より桃色の絹の手巾をば取り出でつつ目を拭いしを膝ののして、怨めしげに瞻りぬ。

「新さん、手巾^{これ}でね、汗を取ってあげるんですがね、そんなに弱々しくおんななすつた、身体から絞るようじやありませんか。ほんとに冷^{ひやひや}々するんですよ。拭^ふくたびにだんだんお顔がねえ、小さくなつて、頸^{えり}ン処が細くなつてしまふんですもの、ひどいねえ、私やお医者様が、口惜^{くやし}くツてなりません。

だって、はじめツから入院したツて、どうしたツて、いけないツて見離しているんですもの。今ン処じやただもう強いお薬のせいで、ようよう持つていきますとね、ね、十滴ずつ。段々多くするんですツて。」

青き^{ちいさ}小き瓶あり。取りて持返して透^{すか}したれば、流動体の平面斜めになりぬ。何ならむ、この薬、予が手に重くこたえたり。

じつとみまもれば心も消^{きえぎえ}々になりぬ。

その口の方^{かた}早や少しく減じたる。それをば命とや。あまり果敢^{はか}なさに予は思わず眩^{つぶや}きぬ。「たツたこれだけ、百滴吸つたらなくなるでしょう。」

「いえ、また取りに参ります……」

といいかけて顔を見合せつつ、高津はハツと泣き伏しぬ。ああ、悪きことをいいたり。

秀を忘れよ

「あんまり何だものだから、僕はつい、高津さん気にかけちゃ不可い。」

「いいえ、何にもそんなことを気にかけるような、新さん、容体ならいいけれど。」

「どうすりや可いのかなあ。」

ただといきのみつかれたる、高津はしばしものいわざりしが、

「どうしようにも、しょうがないの。ただねえ、せめて安心をさしてあげられりや、ちつとは、新さん何だけれど。」

と予が顔を打うちまもれり。

「それがどうすりやいいんだか。」

「さあ、母おつかさん様のことも大抵いい出しはなさらないし、他ほかに、別に、こうといって、お心こころ懸がりもおあんなさらないようですがね、ただね、始終心配していらっしやるのは、

新さん、あなたの事ですよ。」

「僕を。」

「ですからどうにかして気の休まるようにしてあげて下さいな。心配をかけるのは、新さ

んあなたが、悪いんですよ。」

「え。」

「あのね、始終そういつていらつしやるの。（私が居る内は可いけれど、居なくなると、上杉さんがどんなことをしようも知れない）ツて。」

「何を僕が。」

予は顔の色かわらずやと危ぶみしばかりなりき。背はひとと汗になりぬ。

「いいえ、ほんとうでしょう、ほんとうに違いますよ。それに違いないお顔ですもの。私が見ましてさえ、何ですか、いつも、もの思をして、うつらうつらとしていらつしやるようじゃありませんか。誠にお可哀相な様ですよ。ミリヤアドも素晴らしいましたっけ。

（私が慰めてやらなければ、あの児はどうするだろう）ツて。何もね、秘密なことを私が聞こうじゃありませんけれど、なりますことなら、ミリヤアドに安心をさしてあげて下さいな。え、新さん、（私が居さえすりや、大丈夫だけれど、どうも案じられて。）とおつしやるんですから、何とかしておあげなさいな。あなたにやその工夫があるでしょう、上杉さん。」

名を揚げよというなり。家を起せというなり。富の市を憎みて殺さむと思うことなかれ

というなり。ともすれば自殺せむと思うことなかれというなり。詮ずれば秀を忘れよというなり。その事をば、母上の御名おんなにかけて誓えよと、常にミリヤアドのいえるなりき。予は黙してうつむきぬ。

「何もね、いまといつていま、あなたに迫るんじやありません。どうぞ悪く思わないで下さいまし、しかしお考えなすツてね。」

また顔見たり。

折から咳せき入る声聞ゆ。高津は目くばせして奥にゆきぬ。

ややありて、

「じゃ、お逢い遊ばせ、上杉さんですよ、可うござんすか。」

という声しき。

「新さん。」

と聞えたれば馳はせゆきぬ。と見れば次の室まは片付きて、畳に塵ちりなく、床花瓶とこはなに菊一輪、いつさしすてしか凋しおれたり。

ふすま 襖左右に開きたれば、厚^{あつ}衾^{ふすま}重ねたる見ゆ。東に向けて臥床^{ふしど}設けし、枕^{まくらもと}頭なる皿^{ちいさ}のなかに、蜜柑^{みかん}と熟したる葡萄^{ぶどう}と装^もりたり。枕をば高くしつ。病める人は頭埋^{かしらうず}めて、小やかにぞ臥したりける。

思いしよりなお瘠^やせたり。頬のあたり太^{いた}く細りぬ。真白うて玉なす顔、両^{まぶた}の瞼に血の色染めて、うつくしさ、気高さは見まさりたれど、あまりおもかげのかわりたれば、予は坐^{すわ}りもやらで、襖の此方^{こなた}に名^なみつ、みまもりてそれをミリヤアドと思う胸はまずふたがりぬ。

「や、」

と座蒲團^{ざぶとん}差よせたれば、高津とならびて、しおしおと座につきぬ。

顔見ば語らむ、わが名呼ばれむ、と思ひ設けしはあだなりき。

寝返ることだに得^えせぬ人の、片手の指のさきのみ、少しく衾^{ふすま}の外に出^{いだ}したる、その手の動かむともせず。

瞳キト据^{すわ}りたれば、わが顔見られむと堪^{こら}えずうつむきぬ。ミリヤアドとばかりもわが口には得^え出ででなむ、強いて微笑^{ほほえ}みしが我ながら寂しかりき。

高津の手なる桃色の絹の手巾ハンケチは、はらりと掌たなそこに広がりて、軽くミリヤアドの目のあたり拭ぬぐいたり。

「汗ですよ、熱がひどうござんすから。」

頬のあたりをまた拭いぬ。

「分りましたか、上杉さん、ね、ミリヤアド。」

「上杉さん。」

極めて低けれど忘れぬ声なり。

「こんなになりました。」

とややありて切なげにいいし一句にさえ、呼吸いきは三たびぞ途絶えたる。昼中の日影さして、障子にすきて見ゆるまで、空蒼あおく晴れたればこそかくてあれ、暗くならば影となりて消えや失せむと、見る目も危うく寥やっれしかな。

「切のうござんすか。」

ミリヤアドは夢見る顔なり。

「耳が少し遠くなつていらつしやいますから、そのおつもりで、新さん。」

「切のうござんすか。」

うなずさま
頷く状なりき。

「まだ可いんですよ。晩方になって寒くなると、あわれにおんななさいます。それに熱が高くなりますからまるで、現。」

と低声こゝえにいう。かかるものをいかなる言ことばもて慰むべき。果は怨はてめしくもなるに、心激うらして、

「どうするんです、ミリヤアド、もうそんなでいてどうするの。」

声高かたわらにいいしを傍より目もて叱られて、急に、

「何ともありませんよ、何、もう、いまによくなります。」

いいなおしたる接穂つぎほなさ。面おもてを背けて、

「治らないことはありません。治るよ、高津さん。」

高津は勢いきおいよく、

「はい、それはあなた、神様がいらっしゃいます。」

予はまた言わざりき。

誓

月凍^いてたり。大路^{おおじ}の人の登^{あしおと}音^{おと}冴^さえし、それも時過ぎぬ。坂下に犬の吠^ほゆるもやみたり。一^{ひと}しきり、一^{ひと}しきり、檐^{のき}に、棟^{むね}に、背戸^{かた}の方に、颯^さと来て、さらさらさらさらと鳴る風の音^{こがらし}。この風^{こがらし}！病^{やま}む人の身をいかんする。ミリヤアドは衣^{きぬ}深く引^{ひき}被^{かつ}ぐ。かくは予と高津とに寝よとてこそするなりけれ。

かかる夜^よを伽^{とぎ}する身の、何とて二人の眠^ねらるべき。此方^{こなた}もただ眠^ねりたるまねするを、今は心安^{あん}しとてやミリヤアドのやや時すぐれば、ソト顔^{かほ}を出^だして、あたりをば見^みまわしつゝ、いねがてに明^{あけ}を待つ優^{やさ}しき心づかい知りたれば、その夜もわざと眠^ねるまねして、予は机^{けい}にうつぶしぬ。

搔^か卷^{いまき}をば羽織^{けつとひき}らせ、毛布^{けつとひき}引^ひかつぎて、高津は予が裾^{すそ}に背^せ向^むけて、正^{ただ}しゆう坐^まるよう膝^{ひざ}をまげて、横^{よこ}にまくらつけしが、二ツ三ツものいえりし間^まに、これは疲^うれて転^う寝^たせり。何^{なん}なりけむ。ものともなく膚^{はだ}あわだつに、ふと顔^{かほ}をあげたれば、ありあけ暗^くき室^{むろ}のなかにミリヤアドの双^{ふたご}の眼^{まなこ}、はきとあきて、わが方^{かた}を見^み詰^めめいたり。

予^{わが}が見^みて取^とりしを彼^{かなた}方^{かた}にもしかと見^みき。ものいうごとき瞳^{ひとみ}の動^{うご}き、引^ひ寄^よするようと思^{おも}われたれば、搔^か卷^{いまき}刎^はねのけて立ちて、進^{すす}み寄^よりぬ。

近よれという色見ゆ。

やがてその前に予は手をつきぬ。あまり気高かりし状に恐しき感ありき。

「高津さん。」

「少し休みましたようです。」

「そう。」

とばかりいきをつきぬ。やや久しゆうして、

「上杉さん、あなたどうします。」

予は思わずわななきぬ。

「何を、ミリヤアド。」

「私わたくしなくりますと、あなたどうします。」

涙ながら、

「そんなことおっしゃるもんじやありません。」

「いいえ、どうします。」と強くいえり。

「そんなことを、僕は知りません。」

「知らない、いけません、みんな知っている。かわいそうで、眠られませんか。眠られませ

ん。上杉さん、私、頼みます、秀、秀。」

予は頭より氷を浴ぶる心地したりき。折から風の音だもあらず、有明の燈影いと幽に、ミリヤアドが目にも光さしたり。

「秀さんのこと思わないで、勉強して、ね、上杉さん。」

予は伏沈みぬ。

「かわいそう、かわいそうですけれども、私、こんな、こんな、病氣になりました。仕方がない、あなたどうします。かわいそうで、安心して死なれません。苦しい、苦しい、かわいそうと思いませんか。私、あなたをかわいがりました。私を、私を、かわいそうとは思いませんか。」

一しきり、また風の戸にさわりて、ミリヤアドの顔蒼ざめぬ。その眉顰み、唇ふるいて、苦痛を忍び瞼を閉じしが、十分時過ぎつと思うに、ふとまた明らかに睜けり。

「肯きませんか。あなた、私を何と思います。」

と切なる声に怒を帯びたる、りりしき眼の色恐しく、射竦めらるる思あり。

枕に沈める横顔の、あわれに、貴く、うつくしく、気だかく、清き芙蓉の花片、香の煙に消ゆよとばかり、亡き母上のおもかげをば、まのあたり見る心地しつ。いまはハヤ何

をかいわむ。

「母^{おっかさん}上。」

と、ミリヤアドの枕の許^{もと}に僵^{たお}れふして、胸に縋^{すが}りてワツと泣きぬ。

誓えとならば誓うべし。

「どうぞ、早く、よくなつて、何にも、ほかに申しません。」

ミリヤアドは目を塞^{ふさ}ぎぬ。また一しきり、また一しきり、刻むがごとき戸外^{おもて}の風。

予はあわただしく高津を呼びぬ。二人が掌^{たなそこ}左右より、ミリヤアドの胸おさえたり。また一しきり、また一しきり大空をめぐる風の音。

「ミリヤアド。」

「ミリヤアド。」

目はあきらかにひらかれたり。また一しきり、また一しきり、夜深^よくなりゆく風の風。神よ、めぐませたまえ、憐^{あは}れなたまえ、亡き母上。

明治三十（一八九七）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

誓之巻

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>